

## 作業療法士の介入による入院患者の行動改善の検討

○山本美保<sup>1)</sup> 吉良明日香<sup>1)</sup> 伊藤美香<sup>1)</sup> 島崎由宇<sup>1)</sup> 末廣正<sup>2)</sup>

医療法人 尚賢会 高知高須病院 1) リハビリテーション部 2) 診療部糖尿病内科

Key Word : (腎臓リハビリテーション), 作業療法士, Barthel Index, ADL

**【はじめに】**作業療法分野において透析患者を含めた腎臓リハビリテーション(以下、腎リハ)は比較的新しい領域である。これまで、腎リハは理学療法士(PT)が中心に運動療法に関わることが現状であった。当院では腎臓病総合診療を目指しているため血液透析患者や慢性腎不全患者の入院が多く、急性期病院へ心血管疾患や整形外科疾患で入院し、回復を目指して当院に転院する例も少なくない。近年、透析患者の高齢化にてADL・QOLの維持改善が課題の一つである。その中で、排泄動作は介護負担感や対象者のQOL、自宅退院との関連においても自立することが重要とされている。当院ではPTに加えて、2018年に新たに作業療法士(OT)が雇用された。しかし、OTの介入がどの程度患者の行動改善に効果があるのかを明らかにしていなかった。

**【目的】**今回、OTのリハビリテーション介入前の2017年度と介入後の2020年度における、ADL評価がなされた患者を検討し、OTの介入による入院患者の排泄関連動作に着目しADLの改善効果をみることで、今後のOTによる介入の改善、向上に役立てることを目的とする。

**【対象・方法】**当院の入院患者について、カルテ情報などの既存情報をもとに後ろ向きにデータを収集した。対象は、2017年度にADL評価を行った入院患者37名(年齢78.1±11.8歳、男/女:26/11名)と2020年度に同様の評価を行った185名(年齢80.4±9.4歳、男/女:108/77名)である。方法は、Barthel Indexを用いて、排泄動作に関連する5項目(車椅子からベッドへの移乗、トイレ動作、平地歩行、排便管理、排尿管理)を行動評価とし、2017年度と2020年度別に比較検討した。

**【結果】**介入件数に関しては、2017年度に比べ2020年度では6倍に増加がみられたが、入院時と退院時の行動評価の総合点比較では、2020年度に介入した患者の改善度の悪化はみられていなかった。また、入院時と比較した退院時の行動評価の比較では、改善群が2017年度64.9%、2020年度67.0%と若干増加し、逆に悪化群が18.9%から7.0%と減少した。介入前と介入終了時の行動評価による比較では、評価点がマイナスになった例を悪化群、20点以上改善した例を改善良好群としてみた結果、悪化群は2017年度13名に対し2020年度7名、改善良好群は2017年度7名に対し2020年度30名であった。2020年度の対象群のみで検討すると、介入終了時の行動評価による比較では、悪化群では死亡者が半数以上にみられた。さらに悪化群では基礎疾患が悪化したものが7割にみられたが、改善群では悪化例は見られなかった。また、改善群では疼痛が緩和されたものが4割にみられ、福祉用具の調整や介護調整が有意に多かった。認知症の有無では差がなかった。

**【考察】**当院でもOTが雇用されて、ADL・QOL改善を目標としたリハビリテーションを積極的に行うようになった。その結果、行動評価の介入件数が6倍と増加した。その理由の一つとして、リハビリテーション部の人員増加(PT・OT)と病棟内にADL評価・改善への取り組みの定着を図った事が考えられた。また、福祉用具の調整や介護調整が改善群で優位に多い事に関しては、患者個々の精神面や認知面を考慮した介助方法・自助具の作成・環境設定などをPT・病棟と共有した結果であると考えられる。今後、2022年診療報酬改定後の透析時運動指導加算でもOTの視点で個々にあわせたADLやQOLの評価・向上、生活指導も行っていきたい。